普通か負痛の偽物嘘憑(クラックライアー)

四季織@ついったーはじめた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通か負痛の偽物嘘憑（クラックライアー）

【Ｎコード】

Ｎ１７６５Ｒ

【作者名】

四季織@ついったーはじめた

【あらすじ】

普通？特別？異常？そんなものに縛られているから君達は弱いんだ。強くなれよ、強くなれ。自らの願う通りに生きればいいんだ――“普通”のはずの少年が、箱庭学園で頑張るおはなし。

プロローグ　「箱庭学園」（前書き）

初めましての方は初めまして。
他作を読んでいただいている方は二度めまして！
四季織です。
好き勝手書いた作品です。
自由です。あと短いです。
おーけーな方はどうぞ！

プロローグ　「箱庭学園」

――４月１日。

世間的には、学生さんはまだ春休みだというのが大半だろう。
４月１日。
エイプリルフール。
今日だけは、３６５日中今日だけが嘘をついてもＯＫという傍迷惑な習慣が根付いたこの国のこの場所で。

俺は騙されて、とある高校に通うことになってしまった。

騙された。
しかも姉に。

思い返せば今日の朝。
俺はいつものように春休みのだらけた生活を開始しようとしていたのに、思わぬ障害が待ち構えていたのだ。

部屋の扉を開けたら、段ボールが一箱置いてあった。
なにも書かれていないその段ボールが、堂々と俺の部屋の前を占拠していたのだからビビったね。

よくわからずに開けてみると、中からは真新しい“制服”やらなんやらと、明らかに新入生の為の用意、的なものが詰まっていた。

わっついずでぃす？

わからないものには手をつけない。
再び箱に蓋をしようとしたら、その手は誰かに阻止された。
誰だ？

ていうか、姉だった。

驚く隙も与えられぬうちにさっさと俺は着替えろと命じられ、姉は俺の部屋を勝手に物色し始めている。
どういう状況だ、これは。

滅多に家に帰ってこない姉がなぜここに？

考えている内に車に乗せられた。

あれー？

強制的に乗せられた車内で、俺は姉に説明を要求。（当然だ）
姉はこう言った。
というか、車内での俺と姉の会話の一部である。

「あたしが勤務してるガッコで欠員がでたのよ。どうしても埋めなきゃなんないから、あんた連れてくってわけ」

いやわけわからん。

「あーもう。つまり、今日からあんたは学校に入学するのよ」

あー成る程ね。
ってちげぇえええええ！
何をさらっととんでもないことを！？
俺が通うことになってた学校は！？
「ああ、キャンセル」
そんな簡単にキャンセルされてたまるか！
俺の中学時代の頑張りはどこへ消えた！
「大丈夫よ。あんたが元々通うことになってた学校よりはいいとこだし、理事長があんたのこと気に入っちゃったんだから仕方ないじゃない」
だからさらっと言わないでくれよ！
「あと、寮だからね。今から飛ばせばギリギリ間に合うかな……」
寮！？
ふ、服とかは？
「朝送っといたわよ」
通りでやたら服が少なかったわけだぜ！
ていうか、今から行くのかよ？
今日4月1日だぞ。
「あの学校、何故か4月1日から始まるのよ。だから今日入学式ね」

急展開すぎて頭がついていかねえよ……

「まあ、頑張りなさいな」

姉ちゃんが言うなら仕方ないのかもな……

えー、あっ、そうだ。

その学校、なんていうところ？

「箱庭学園」

箱庭学園て……

あの、箱庭学園？

「そうなるわね」

マジで？

「マジで」

マジかぁ……

「ほら、着くわよ。着替えとかは寮に届いてるし、必要なものは鞄に詰めといたから」

え、俺降ろされるの？

ここで？

「じゃ、頑張ってねー」

――――といった具合に、俺はこの箱庭学園に通うことになってしまった。

結構な特例入学だよな。

ああ……。

仕方ない、とりあえずは、この門を潜るか。

これからの学園生活を本気で気に病みながら、俺は箱庭学園への入学を、やむなく了承したのだった。

第1箱　「ただの普通（ノーマル）ですよ」（前書き）

続いて1話です。
短いです！

第1箱　「ただの普通（ノーマル）ですよ」

箱庭学園というのは有名どころだったし、何より俺自身、元から少しだけ興味のあった学校だったために、多少の概要は頭に入っていた。

この学園が、他の学校とは少しばかり違うということも。
普通（ノーマル）のことも、特別（スペシャル）のことも、勿論異常（アブノーマル）と呼ばれる人間のことも。
少しだけなら知っていた。

それに、この学校には古い知り合いが入学するのだと言っていたし。
俺がいるのがわかったら、驚くのだろうなぁ……。

箱庭学園は、他の高校に比べ敷地面積がかなり広い。
何分、スポーツ特待生が多数在籍している。
そのために異常な程、それこそありとあらゆるスポーツ関連の施設が完備されているからだ。
……のだと聞いた。

校門から既に何分か歩いたけれど、まだ校舎には辿り着かない。
この距離を一人で歩くのは少し気が引けるなぁ、というくらいの。

「なあなあ、そこの兄ちゃん」

考え事中に声を掛けられた。
えーと、目線からして俺ですかね？
そう思って足を止める。
いい笑顔で話しかけてきた（らしい）彼女は、何故か柔道着をばっちり着込んでいた。

「……何ですか？ていうか、俺ですか？」

「そうそう。ジブン、柔道部入らへん？」

「柔道部？」

ああ。
通りでこの人、柔道着な訳だ。
着慣れているのがわかる。

「ジブン、新入生やろ？ほんなら、入学式終わった後にでも見学に来いや」

「勧誘ですか……悪いんすけど、俺部活とかやる気ないんで」

「ええやんええやん。試しに来てみいな」

困ったな。
俺、本当に部活やる気ないのだが。
仕方ない。

「暇があれば、行きますよ」

結局断りもせずにやんわりと拒否る。

「そうかい。待っとるから、いつでも来(キ)いや」

「……あの、なんで俺なんかに直接声掛けてるんですか？俺、ただの普通(ノーマル)ですよ」

すると柔道着の先輩は、にやりと笑って言った。

「わかっとるやん。ウチはキミみたいな子、めっちゃ好きなんよ。普通(ノーマル)言うとって、結構いい体つきしとるで？」

「そりゃどーも。えっと、こんだけ言われといてあれなんで、あのー、あなたの名前は？」

「せやな。ウチの名前は鍋島猫美いうねん。これでも柔道部部長なんやで？」

あ、部長だったのか。

部長自ら勧誘なんて、熱入ってるな。

「それじゃ」

「暇んなったらおいでぇな」

軽く手を振られた。

だからすっげえ恥ずかしかった。

部長となるとあの人は、やっぱり特別(スペシャル)なのかな？

どうやら他の部活も勧誘活動をやってるみたいだ。

だったら、俺が声をかけられたのも不思議じゃなかったんだよな。

目立ってない目立ってない。
こうなってしまった以上、俺は静かに三年間を過ごすと決めているんだ。
決して目立ったりせず、のんびりと平和に過ごすんだ。
気合いを込めたガッツポーズ。

そうして俺は再び足を動かして、校舎へと向かった。

第2箱　「仲良くしようぜ」（前書き）

相変わらず短い。
不定期更新です。あしからず！
だらだらです。

第2箱　「仲良くしようぜ」

箱庭学園の校舎は白を基調とした清潔感のある、ふつーの校舎だった。
とはいっても何を期待してたわけでもないのだが、早速壁に張り出されているクラス表の確認を始める。

こうして見ると入学した生徒もかなり多いらしく、組数が半端じゃなかった。
各クラスの名前の数も少なくない。
相当な人数がいるんだな。

俺は自分の名前を探す。
きー、きー、きょーこーうー……を。

一組に名前発見。

そうか、一組か。
れっきとした普通（ノーマル）なクラスであることを願う。

確か、十組までが普通（ノーマル）、十一組が特別（スペシャル）クラスだったっけ。
そして、十三組が異常（アブノーマル）クラス……。

一組。
やはり、普通のクラスっぽい。

それだけ確認して、俺はたくさんの生徒が集まっているクラス表前から早々に立ち去った。
人混み、苦手だし。

長い廊下を進んで、自身のクラスである一年一組に到着する。
まだ余り人数は集まっていないらしく、少数の人間がお互いに自己紹介をしたり、挨拶をしたりしていた。

かくいう俺は知り合いゼロ。
同中の奴もいないし、困ったな。
一人で孤立は厳しいぞ。

「お、お前も一組？」

後ろから声を掛けられた。
振り向くと、知らない男子生徒が一人。
誰だ？

「ああ。となるとお前も？」

その男子生徒は人が良さそうに笑って、

「人吉善吉だ。よろしくな」

「……俺は、嘘神緋色（キョコウヒイロ）だ。よろしく、人吉くん」

「おいおい、随分よそよそしい呼び方だな。善吉でいいよ。これから一緒のクラスなんだし、仲良くしようぜ」

「わかった。それなら俺のことも緋色でいい。これからよろしくな、善吉」

「ああ、よろしくな、緋色」

――とまあ、こんな感じに俺は箱庭学園生活初日から、友達を作ることに成功した。

人吉善吉。

通りで、人の良さそうな顔をしているわけだ。

第3箱　「全くだよ」（前書き）

すみません！
ちょっとミスしましたので、直しました。

第3箱　「全くだよ」

人吉善吉。

人間の人に大吉の吉、善の善に吉祥寺の吉で、人吉善吉。
そう彼は名乗った。
俺は名乗り返した。

そんなこんなで、俺は初日から“話し相手”をＧＥＴしたわけだが。
見るからに良い奴っぽいし、こういう奴が一人でも居てくれると正直安心だ。

何せ俺は、今朝ここの入学が決まったような男だからな……

友達なんているわけがない。
自宅からも結構遠いんだよなぁ、ここ。
そういえば姉ちゃんが寮暮らしがどーのって言ってたようなないような。
寮なんて、初めての経験。
てか、寮なんてあったんだな。
まだ敷地内の全てを見たわけじゃあないから、よくわからない。

……教室にいる人数も段々と増えてきた。
みんなクラスを見終わって、各教室に散っている頃なのだろう。

さて、俺の知り合いは何組だろう。

だが、思い返してみると、十一組や十三組の名簿はあそこになかった気がする。
特待生は最初から振り分けられているのかな。
だとしたらあいつの名前は見つかるはずがないのだけど……

「そういえば緋色、他のクラスの名簿とか見たか？」

「見てないけど。どうかしたのか？」

「いや、俺の知り合いが一緒に入学したんだけどさ、そいつの名前、見当たらなかったんだよ」

善吉も俺と同じようなことを考えていたようだ。
だから、考えていたことをほとんどそのまま話す。

「あー、お前の幼なじみって特待生？」

「ああ。そうだけど」

「じゃあ、クラス表には載ってないかもな。俺の知り合いの名前も見なかったんだけどさ。この学校って特待生は別クラスになるから、事前に知らされてるんじゃないか？」

「成る程な。通りで見付からなかったわけだ」

「まあ、予想だけどな」

善吉は納得してくれたようで、突然閃いた時ような表情をしていた。
あんな説明でわかってくれてよかった。

「幼なじみと一緒の学校か。俺なんて、全然知り合いいないから困ったよ」

幼なじみ、という頼れる存在がいることが少し羨ましい。
まあ、善吉みたいな奴には友達とかすぐできそうだけど。

「お前、結構外部から来てるのか？」

「ああ。ていうか無理矢理なんだけどな……」

泣きそうになってきた。

「無理矢理って……親に決められた、とか？」

「いいや、姉ちゃんに」

そう言うと善吉は、驚いたような顔をして、

「姉ちゃんか……なんか、怖そうな姉ちゃんだな」

「全くだよ」

なんて話していると、いつの間にか先生らしき人が教卓につくところだった。
俺達は慌てて自分の席を探して、座る。

「一年一組担任の篠内羽止（シノウチハドメ）だ。これからよろしく」

一年一組の担任教師はポニーテールの目立つ女性だった。

羽止なんて、珍しい名前だな……とも思ったけれど、考えてみれば俺の名字のほうがよっぽど珍しいんだよな。
あと、ついでに言うなら綺麗な美人。
少なくとも、一般的な高一男子である俺から見れば。
という話だ。

「クラスに集まってもらって悪いが、この後すぐに入学式と始業式が執り行われる。移動をするので各自準備するように」

一言告げると、担任篠内先生はさっさと立ち去ってしまった。
あれがクールビューティーというやつなのか……？

どうやら入学式と始業式は、体育館で行うらしい。（さっき小耳に挟んだ）
まあ、一般的に考えてそうだよな。
となると移動しろ、ということなのだろうか。
そう思っていたら善吉が、

「体育館に行くみたいだぜ。各自行けってこと……だよな？」

「どちらにしろ、俺は場所わかんないから案内頼むぞ、善吉」

意地悪く言う。
まあ、場所わかんないのは誰だって同じかもしれないがな。

第４箱　「新入生代表」（前書き）

前回変なミスをやらかしてしまい申し訳ありませんでした……

第４箱　「新入生代表」

俺と善吉は、体育館へと向かっていた。
そこで行われるらしい入学式に出席するために、だ。

なので勿論、他のクラスメイトや他クラスの面々も移動を開始していたので、迷子にはならずにすんだ。
結果オーライ。

向かう途中で何だか筋骨隆々な奴や、体が異常に細い奴を見掛けたのだけど、ああいう奴等は特別（スペシャル）である十一組の生徒なのかな。
ということから、クラスは違えど校舎は一緒なのだと推測した。

「入学式とか言ったって、色々挨拶とか聞いて終わりだろ？面倒だよなぁ、こういうの」

俺は愚痴を溢すが、隣を歩く善吉はそんな風でもなく、

「まあまあ、けどよ、入学式ってことは先輩やらも出るってことだろ？他のクラスの奴らとかも見ておけるのはラッキーだ」

ポジティブな考え方だなぁ。
俺はどうにも人混みは嫌いだから、行事とかは大体苦手なんだよな。

段々と風が冷たくなってくる。
やや広くなってきた廊下を進んでいくと、体育館らしき建物が見えてきた。

広い。
でかい。
箱庭学園の体育館は、でかかった。
膨大な数の生徒を全員収用できるんだから、でかくて当たり前なのだが。
で、うん。
立ち見らしい。
座らせてくれよ、って感じだけどそんなスペースもなさそうだ。
軽く引くくらいの生徒数。

善吉が言っていた通り、やはり二・三年生も全員出席のようで、俺達一年生の後ろもほとんど生徒で埋まっている。
どんだけマンモス校だよ。

……あ、入学式が始まったらしい。
考え事に熱中していたら、いつの間にか始まっていた。

うんうん。
色々な先生の挨拶が続く。
正直興味がない。
はやく終わらないかなぁ、とずっと祈っていた。

『続いて、生徒会長挨拶――――』

む、生徒会長？
ああそっか。
先生方の挨拶が終わったら、次は生徒会長の挨拶なのか。

一体どんな人物がこの箱庭学園の生徒会長を努めているのか、気になる。
それは他の一年生も同じようで、皆興味津々、といった顔つきで壇上を見上げていた。

『――はじめまして新入生諸君。俺が箱庭学園第９７代生徒会長、日之影空洞だ』

……で。

“でかい！”

壇上の上からでもはっきりわかる。
とにかくでかい。
身長だけの話じゃない、その、何というか――

そう。
圧倒的な、存在感だ。

見せつけられるような、惹き付けられるような、存在感。

いやいや、吃驚だ。
流石は箱庭学園の生徒会長。
ただ者……ではなさそうだ。

『――有意義な学園生活を送れることを、祈っている』

驚愕に一瞬停止状態に陥っていたら、話は終了し、日之影会長は壇上から姿を消していた。
あれだけインパクトの大きい人物だ。
きっとすぐに話題に――――

『続いて、新入生代表挨拶』

アナウンスが入る。
次は新入生代表か。
……誰だろう。
少しだけ気になる。

『新入生代表、黒神めだか』

……ん？

今、黒神めだかって聞こえたような……

『私が新入生代表、黒神めだかだ』

く、黒神って……
黒神、めだか？

第４箱　「新入生代表」（後書き）

本作品に関して
誤字脱字・感想・質問・アイデア等お待ちしております＾＾

第5箱　「いつ何時でも応じるぞ」（前書き）

はい、原作主人公です。

第5箱　「いつ何時でも応じるぞ」

『私が新入生代表、黒神めだかだ』

「んなっ……！」

思わず声が出た。
黒神めだか。
黒神めだかだ。
黒髪ロングヘアーの超絶美女……
間違いなく、黒神めだか！

『本日をもって、私や同級生らはこの箱庭学園に入学する。誰もが夢と希望を胸に持って入学を決意したであろう。誰もが期待を背負って入学をしてきたであろう！』

凛とした立ち姿。
張りのある声。
堂々と立つその姿に、誰もが動揺していた。

『人生は退屈か？未来は退屈か？現実は適当か？安心しろ、それでも生きることは劇的だ！』

俺だって、

俺だって動揺を隠せない。
あれは黒神めだかだぞ？

『充実した学園生活に励め。勉学に徹しろ、運動を怠るな、友情を大切にしろ愛情を忘れるな。それから感謝の意を示せ』

ああ、よく考えれば見慣れた風景だ。
懐かしくもある。

『とはいえ貴様らにも悩みがあるであろう。人間は悩む生物だ、恥じることではない。だがそんなときに重要なのは、助け合う友や助言をくれる良き教師の存在だ。そんな友や師を作れ。よりよい青春を送りたければまずは自分が努力しろ。私は貴様らの誰もが幸せになれることを願っている。誰一人としてこの箱庭学園で不幸になることは私が許さないぞ』

懐かしいねぇ。
ああ、懐かしいとも。
超上から目線の良い例だ。
“めーちゃん”はいつだって偉そうで、全部わかったような口振りで……

『では、こんなところで挨拶を終了する。一年生、勿論二年生でも三年生でも構わないが、悩みがあれば相談しに来るがよい。私はいつ何時でも応じるぞ。――――それでは、新入生代表、一年十三組黒神めだかの挨拶とする』

……。

なんてコメントしづらい新入生代表挨拶だ。
最初から最後まで上から目線だったな。
一言で言えば、偉そうだった。
黒神めだかは何一つ変わっていない。
そう思った。

———さすがにあの挨拶には、皆が騒然とする。
当たり前だ。
あんな挨拶をかます新入生など珍しすぎる。
強烈な印象を残した入学式。
後味悪く、箱庭学園入学式は無事（？）終了した。

「「印象的過ぎる」」

見事にハモった。
うん、お互い考えていることは一緒らしいな。
入学式が終了し、所変わって一年一組。
それぞれ雑談に励むなか、打ち合わせなしでハモりに成功した俺と善吉だった。
「カッ、相変わらずだぜ黒神めだか……入学式でぶちかましやがった」
悪態をつく善吉。
「善吉……もしかして、知り合いか？」

「知り合いも何も……あいつが、俺の幼なじみだよ」

「……マジで？」

「マジで」

いやぁ、驚いた。

まさか、善吉の言う“幼なじみ”が、あの黒神めだかだったとは。

「三歳くらいからの付き合いでさ。腐れ縁みたいなもんだよ」

「そっか……それにしてもあの新入生代表が、なあ」

「昔からああなんだ。人の前に立つのに慣れてるってーか、人の上に立つのに慣れてんだよ、あいつは」

苦々しく言ってはいるが、自慢するようにも聞こえる。

何だかんだ言っても、善吉は黒神めだかのこと、それほど悪くおもってないんじゃあないか？

「まるで政治家みたいな演説だったしな」

「だろ？しかも、かなりの上から目線」

「だよな。お前と黒神には悪いが、正直若干引いた」

「それが普通の反応だって。めだ……く、黒神が普通じゃないだけだ」

言い間違えたみたいだけど、何だ？
なぜに顔を赤らめている。

「黒神、ねぇ……」

出てくる溜め息。

うん、余計に不安になってきた。

第5箱　「いつ何時でも応じるぞ」（後書き）

本作品に対して
誤字脱字・感想・質問・アイデア等お待ちしております＾＾

第6箱　「専らの噂だぜ？」

一年一組にて。

今日は授業はないらしく、簡単な自己紹介だけして解散するようだ。
自己紹介て。
小学生かよ。

席順は勿論番号順なので、俺の出番はそう遠くない。

一年一組一番という栄光（？）を手にした藍垣（アイガキ）くんの挨拶が終了する。

ああ、なんて言おう。
こういうの苦手なんだよ。
自己紹介なんていつぶりだろう……
マジで悩む。

一年一組六番、花鳥（カチョウ）くんの挨拶も終了。

近づいてきてしまった。
どうすればいいんだ……
紹介すべきところなんてないぞ。

一年一組八番の紀楽（キラ）さんの挨拶まで終わった。

次は俺。

「えー、九番、嘘神緋色（キョコウヒイロ）です。趣味は楽器、よろしく」

ぱちぱちぱち……と拍手の音。

はい終わったぁ！

すごい気が抜ける。

我ながら小心者だぜ。

机に突っ伏したかったけど、篠内先生は相変わらずの鋭い眼光を向けていたのでやめておく。

大分番号は進んでいる。

次、“し”の人。

「不知火半袖（シラヌイハンソデ）ちゃんでーす！趣味はひみつー。よろしくお願いしまっす♪」

不知火……

んー、どこかで聞いたことのあるようなないような……

それにしても随分立派なアホ毛だな。

次の人。

「菅原遥々（スガワラハルバル）。よろしくねー」

何というか、今時の流行を全て詰め込んだような奴だった。

しぶやーって感じ。

うぅむ。
知り合いがいないだけに、この挨拶は意外と重要性が高いのかもしれん。
ということに今更気づいた。
「人吉善吉。よろしく」
あれ、もう善吉まで回ったのか？
早いな……
考えている間に随分進んでしまった。
「無理原（ムリバラ）……咲乃（サキノ）。よろしく、お願いします」
無理原さん、前髪がかなり長い。
印象的だ。
「槍雨日付（ヤリサメヒヅケ）。よろしくでーす」
何故かニット帽。
何故にニット帽？
帽子キャラ、なのかな……
「綿条素性（ワタスジスジョウ）です。よろしくお願いします」
最後の人の挨拶が終わった。
同時に、篠内先生が立ち上がる。
「では、これで終了とする。尚、明日から通常授業が開始する。遅れないように注意しろ」

起立
注目
礼

の三拍子を終え、この日は解散となった。

やれやれ、これでやっと初日終了か。
疲れたなぁ。
疲れたよ……。

「緋色、もしかしてお前って“寮”通いか？」

善吉が俺にこう言った。
寮……、ああ、そういえばそうだったな。
俺、寮通い。

「そうだけど。お前は……通いか？」

「ああ。しっかし、お前も勇気あるよな」

「？」

勇気ある？
どういうことだ？

「“あの、箱庭学園の男子寮に通うんだろ？“」

「……なんか、まずいのか？」

そんな話は聞いたことがない。
というか、寮の存在自体知らなかった。

「まずいっていうか……」

善吉は言いづらそうな顔をして、頬を掻く。
な、なんだっていうんだよ……

「変人やらが集いまくってるって、専らの噂だぜ？」

第6箱　「専らの噂だぜ？」（後書き）

キャラ出過ぎですがあんまし重要じゃないのでご安心を。

地震、皆様大丈夫だったでしょうか？

皆様の無事を祈っております。

本作品に関して

誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております＾＾

第7箱　「よろしくな」（前書き）

第7箱　「よろしくな」

滅茶苦茶気が重い。
ああ、足がまるで石のようだ。
どういうことなのか全く理解していないまま、俺は箱庭学園男子寮へと向かっている。
箱庭学園男子寮――――通称“鳥籠”。
善吉の話によると、利用者はそれほど多くないらしく、どうやら奇人変人の巣窟と化しているそうだ。
噂になるくらいの変人って……。
だから俺の足取りは重いのだ。
びっくりするぐらい重い。
ったく、何でったってそんなところに通わなきゃならんのだ。
姉ちゃん……。
まいしすたー……。
校舎を出てから、もう大分歩いたと思う。
だが、それらしい建物は見えてこない。
話によれば、一応敷地内にあるということだったので、あることはあるのだろうが。

「敷地内とは言っても、最北端だからな。無理もない」

「うわぁっ！」

こ、心を読まれただと！
本気で驚いて振り向く。

「別に心を読んだ訳じゃねーよ。行橋じゃあるまいし」

また読まれた！
って俺、声に出してる？

「さっきからずっと声に出てたぞ」

「マジっすか！」

恥ずかしー。
すっげぇ恥ずかしい奴じゃん。
誰もいないと思って油断した……

「……ていうか、誰ですか？」

“声はするが、姿が見えない。”
暗殺者か、とか思ったけど絶対違う。

「おいおい、もう忘れたのか？入学式、出てたろうが」

「入学式……って」

こんな声の人、いたっけ……

ってあああああああ！

「生徒……会長！」

思い出したぁ！

この人、さっき挨拶してた日之影空洞（ヒノカゲクウドウ）！

てか姿も見える……どうなってんだ？

「嬉しいもんだな。お前、入学式で“俺のことに気付いてたろ？”」

「そりゃ、普通気付きますよ」

こんなに“巨大”な人間を、俺は見たことがない。

忘れるわけもないだろう。

だけど。

俺はついさっきまで、この人に気付いていなかったのだ。

明らかに———異常だ。

「いいや。“気付くことが異常なんだ”。多分全校生徒の中で俺の姿を“認識”したのは、お前を含めて二人くらいだぜ？」

「気付くことが異常って……」

どういうことなんだ？

「『他人に認識されない』――――それが俺の異常性（アブノーマル）だからな。改めて、俺が箱庭学園生徒会長の日之影空洞だ。よろしくな新入生」

異常、性。

ああ、そうか。
この人は、十三組（アブノーマル）なんだ。
《認識できない》“異常性（アブノーマル）”
そんなキャラ、いていいのかよ。
戦闘ならほぼ無敵じゃねーか……

「で、お前は……誰だ？一応、新入生は全員覚えたはずなんだが」

新入生は全員覚えた、って……
軽々しく言ってるが、物凄いことだよな。
新入生全員で何人いると思ってるんだ？
とんでもない。
ていうか、俺のことは知らないんだな。
当たり前か。

「俺は、嘘神緋色です。一年一組の」

「嘘神……そうか。お前が例の“特例”入学生だな」

「特例？ああ、多分そうです」
姉ちゃんのコネで入学、だからな。
特例もいいとこだ。
「それにしても……嘘神、お前が一年一組だなんてな」
「……どういう意味です？」
一年一組……ですが？
それがなにか？
「何呆けた顔してんだよ」
笑われた。
「いや……」
全く意味がわからないもんで……。
口もあいていたらしく、中が乾く。
日之影会長は、そりゃあもう屈託なく笑って言った。
「お前、明らかに異常だぞ？」

第7箱　「よろしくな」（後書き）

日之影（元）会長、好きです。
今後でてくる可能性高いですw

本作品に関して
誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております^^

第8箱　「阿呆が」（前書き）

あれ……

《十三組の十三人》ってルビに・なんかはいらな……あれ？

みたいな感じです。

今回もよろしくお願いします。

第8箱　「阿呆が」

箱庭学園男子寮。
通称“鳥籠”。

広大な面積を誇る箱庭学園の隅の隅、最北端に位置する場所にそれはある。
利用している生徒は少ないが、実は約半数以上を特待生が占めているのだ。
つまり、“鳥籠”には特別（スペシャル）や異常（アブノーマル）が多く在籍しているのである。
特に異常（アブノーマル）の十三組生は、登校免除というふざけた待遇を受けているため、寮から出ない生徒も多いらしい。

逆を言えば、“鳥籠”では普通（ノーマル）が極端に少ないというおかしな状況が形成されているのだが、そんな空間は他にないだろう。
そんな場所に送り込んだ姉ちゃん、許すまじ。

敷地面積は全体の約１０分の１。
それはつまり、校舎から歩いて向かったとしても相当な体力と時間を食うということであり。
即ち。

「俺の体力の限界……っ」

というか、足が。
足が痛い。

何でか知らないけど、寮に向かう途中――――日之影先輩と別れたあたりから急に歩きづらくなった。
何故だ。
文字通り足が石のようだったぞ。

「何でたかが寮に行くくらいで、そんな不思議トンデモ現象に遭遇しなきゃなんねえんだよ……」

疲れすぎて独り言連発。
何か、こう、この気持ちを誰かに伝えたくて仕方ないのに誰もいないからつい口にしてしまう。
聞き苦しい言い訳だよ、ああ悪かったよ。

……にしても、寮はどこなんだ？
ていうか、どの建物が寮なんだ？
部活関連の施設が多すぎて、どれが“鳥籠”なのかわからない。

「……あれ？」

疲れきった相貌でふと前を見ると、看板らしきものが立っていた。
白い板に乱雑な字で、

「『男子学生寮、右折してすぐ！』……ね」

りょーかいりょーかい。
右に曲がればいいんだな。
もうすぐそこだったんじゃないか。
よかったよかった。
これ以上歩いたら明日筋肉痛で大変なことに――――

「……」

う、わぁぁぁ。
うわあ。
入りたくねえ。
全力で拒否したい。
……といった第一印象を持てる建物が右折した先にあった。

えー？
あそこ……だよなあ？
行きたくねえな……
間違ってればいいのに……

僅かな希望も虚しく、この珍妙な建物は確かに“鳥籠”だった。
いや、看板があったんでな。

マジかよ、ここに入るのかよ。
まあ確かに、規模はかなりでかいが。
いやいやそんなことは関係ない。
俺のプライドが。
俺のプライドが入ることを断固拒否している。

うっ、くそ。
入るしかない。
入らないと野宿だ。
野宿野宿野宿……

よし行くぞ！

と意気込んだ瞬間だった。

「よーぅこそ箱庭学園男子学生寮“鳥籠”へ！」

ぐわんぐわん、とマイクのエコーをこれでもかというほどに響かせている声が、どこからか聞こえた。
耳を貫くような大音量。
滅茶苦茶近所迷惑だろ。
……ていうか、何、誰？

「さあ入りたまえ新入生“諸君”！私達は全身全霊で君達を歓迎するぞ！」

だからマイクの音量がでかいって！
いや、マイクじゃない……スピーカーか？
あそこに取り付けてあるスピーカーからか？
新入生って。
やっぱ俺じゃん。

無視するのもなんだし、とりあえず入ってみるか。
誰にも見られていませんように。

中に入ると、数人の姿が見受けられた。
新入生か？
それとも、先輩か？

“鳥籠”の内部は外装とは裏腹に、案外普通の学生寮の造りになっていた。

何だこの無駄なギャップは……
清潔感溢れるふつーの感じ。
だったら外も普通にすればいいのに。
「そういうわけにもいかないのだよ。外見（デザイン）を酷く気にする厄介な奴がいるものでな！」
「また心を読まれた！」
って日之影先輩は心を読んだわけじゃないんだった。
いやでも、普通にびっくりするよ、これは。
「心を読むだなんてそんな馬鹿真似、《十三組の十三人（サーティーンパーティー）》じゃあるまいし至極　普通（ノーマル）であるこの私ができるわけあるまいが！」
何かすごく誇らしげに言われた！
大したこと言ってないのに！
ていうかさーてぃー……？
何だそれは。
ていうか誰だ！
ツッコミどころが多すぎる！
「あぁ全くやれやれ、近頃の1年生はそんなことも知らないのか？
駄目だな、なっていない。という訳で私のような親切な“副寮長”が救いの手を差し伸べてやろォゥオ！？」
ええー！？
リアクションをとる間もなく、副寮長（仮）に容赦ない裏拳が叩き込まれた。
若干涙を浮かべながら勢いよく振り向く副寮長（仮）。

「阿呆が。ただの新入生にそんないらんこと吹き込んでどうするつもりだこの阿呆が」

「ていうか痛！思ったよりも痛い！何をする！」

「リアクションがウザい。あとそのちょっと間違った高校デビューしちゃったみたいな髪の毛とサングラスも合わせるとハイパーウザい」

酷い……

余りに酷い言われようでこちらまで悲しい気持ちになってきた……。

「すまないな、そこの新入生。こいつは阿呆だから仕方ないんだ。許してやってくれ」

「い、いえ……」

「おい光鎚（ヒカヅチ）貴様、先輩に向かってその口のきき方はないんじゃあないか！？悲しくなるだろうが！」

怒り方が理不尽だった。

けど裏拳を放った人物も人のことを言えないような、そんな金髪を光らせて。

「俺、光鎚弓矢（ヒカヅチユミヤ）。この阿呆は一応ここの最高責任者、右速水（ミギハヤミ）。ついてこい、部屋に案内する」

……断るわけにもいかなかったので、とりあえずついていくことにした。

第8箱　「阿呆が」（後書き）

本作品に関して
誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております。

※ただいまだしてほしいなーキャラを募集中。
　詳しくは活動報告にて。

第9箱　「弓矢でいい」（前書き）

……他作品のネタを使いすぎている。

みたいな感じです。

今回もよろしくお願いします。

第9箱　「弓矢でいい」

見た目が金髪ヤンキーみたいな光鎚弓矢（ヒカヅチユミヤ）先輩に連れられ、清潔感溢れる寮内を進む。
ここの最高責任者らしい副寮長は、光鎚先輩に襟首を掴まれつつ後ろ歩きで頑張っていた。
そりゃあもう文字通り頑張っていた。

「1年は基本三階だ。2年は二階。3年は一階。二人一部屋で生活してもらう」

右速水先輩は、後ろ向きに歩きながら俺に説明をしてくれているのだ。
サングラスがかちゃかちゃと残念な音を立てている。
健気だった。

「この悪魔男爵――――ではなく光鎚は部屋数の関係で、2年だが三階住まいだ。私は一階だがな」

悪魔男爵て。
何で吸血忍者の頭領なんだよ。
ああ、またわかる奴にしかわからないツッコミをしてしまった……

「エレベーターもあるが、あれはあまり使わない方がいい」

今度は悪魔男爵（笑）こと光鎚先輩。
うーん……何故だ？

まあ、いっか。
とかなんとか言っている内に、１年（＋光鎚先輩）が使用するらしい三階へ到着した。
「ああそうだ。お前、名前は？」
「えっと、嘘神緋色です」
「嘘神……？」
何故だか先輩は不思議そうな顔をしていた。
だが、大して表情も変えずに歩き続けていく。
「貴様の部屋は６６６号室、だな。……縁起が悪いことこの上ない部屋だ。運が悪かったな」
未だ後ろ歩きの右速水先輩が教えてくれる。
ていうか少し笑われた。
これは端から見たらすごい状況なんだろうな……
不良が不良の襟首掴んでるように見えなくもない。
「えっと……右速水先輩が副寮長ってことは、寮長がいるってことですか？」
何気なく聞いてみた。
のだが。
「……」
右速水先輩は明後日の方向を向いたまま何も喋らない。

……なんかいらんこと聞いたのか、俺。
見かねたのか、光鎚先輩が無表情を崩さずに俺に言う。
「そのうちわかる。ただ寮長は“揺籠（ユリカゴ）”の寮長も兼任しているから、滅多に見ないと思う」
「揺籠……？」
「学園の最東端、箱庭学園女子学生寮のことだ」
“鳥籠”に続いて“揺籠”か。
ネーミングセンスがあるんだかないんだか……
にしても、そうなると寮長がどんな人物なのか気になる。
もしかして“十三組（アブノーマル）”なのか？
「ん、貴様　十三組（アブノーマル）に知り合いでもいるのか？」
「え？」
また心を読まれた。
「ただの読心術だ」
「れっきとした技術だったんですね！」
……いつもの調子で突っ込んでしまった。
いや、そうじゃなくて。
「一応知り合いっていうか、古い馴染みっていうか」

「幼なじみか！ひゅーひゅー」

「ちょ、何で冷やかすんすか！」

「恋人とかではないのか？」

「漫画の読みすぎですよ……もしくはギャルゲーのやりすぎっすよ！」

やばい。
何か乗ってきちゃった。
いつものノリになってきちゃった。

「なんだ、つまらんな。幼なじみといえばそういう……なんか……関連性というか……ふつうはもっとこう……」

「……なんかあったんですか？」

「……聞かないでくれ……ぅぅ……」

泣かせてしまった。
……そんなに辛い思い出だったのか？
すごい罪悪感が。

「高3が泣くな。みっともない。ほら、着いたぞ」

そんな右速水先輩にチョップを一発食らわせ（鬼のようだ……）、
一つの扉の前で立ち止まる。
気付けば、一番端まで来ていたらしい。
うわ、一番端か。

いちいちめんどくさいな。

「ここがお前の部屋だ。わからないことがあったら、いつでも聞いて」

そう言って、俺の掌に鍵を置いてくれる。

「……ありがとうございます」

「それじゃあな。あと、俺のことは弓矢でいい。それと――」

扉を開けたらものすごく軋んだ音がしたために、よく聞こえなかったが。

恐らく滅茶苦茶早足で去っていった弓矢先輩は。

「やあやあ久しぶりだね。覚えているかい？君の大切な幼なじみであり僕の最愛の妹であるところのめだかちゃんのお兄ちゃん、黒神真ぐろ」

ばたん。

――うん。

恐らく先輩は、頑張れと言ったのだろう。

「……っかしーな。重度の幻覚症状が。」

「何をするんだ。ちょっとサプライズを仕掛けてみたくらいで」
「いらん計らいはしなくていい！数年振りなのに何がサプライズだ！ていうか何であなたがここにいるんですか――――真黒さん！」

「ああそうとも。久しぶりだね緋色くん。僕こと黒神真黒さんだよ」

……ここ、俺の新居の筈だよな？
何でこの人、あたかもここが自分の部屋みたいな顔して立ってるんだ？
何でこの人の目はこんなにキラキラ輝いてるんだ？

「ここまで変わらない人間も、いるもんですね」

はっはっはー、と笑ってみた。
……なんてこった。
この人もいたのか……！
めーちゃんだけならまだしも、真黒さんまでいるなんて。
恐るべし箱庭学園。
本当に恐ろしいよ箱庭学園！

「いやあの、久しぶりですね――――真黒さん。あのー、何でここに？」

「君と久しぶりに話したくてね。わざわざ出向いてきたんだ、感謝して欲しいくらいだよ」

「……そっすか」

追い返すわけにもいかず、とりあえず話をしてみることにした。

第9箱　「弓矢でいい」（後書き）

変態さんとお話します。
たぶん。

本作品に関して
誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております^^

第１０箱　「忠告だ」（前書き）

第１０箱　「忠告だ」

黒神真黒。
名字の通り、入学式において印象的すぎる強烈な挨拶をぶちかましためーちゃんこと黒神めだかの、お兄さんである。
めーちゃん曰く、変態。
まあ、俺に言わせてもそれは同じなのだが……
とにかく妹大好き。
つまり黒神めだかのことが好きすぎてどうしようもないのだ。
それは、昔見ていたからよく知っている。

「そりゃあ当たり前も当たり前さ。僕の人生の目的、目標というべき妹への想いがそんな簡単に変わるわけがないだろう？」

「……そうっすね」

妹のこととなると途端に目が輝き出すのも、変わりなかった。
最後に話してから数年。
妹のことに関しては何一つ変わりないことだけが確認できている状況。
何でここにいるんだよ、この人。

「で、俺に何の話があるんですか？ていうか真黒さん、箱庭学園の生徒だったんですね」

「いや、僕は中退さ。今はしがない旧校舎の管理人だよ」

「旧校舎なんてあったんすね。中退……したんですか」

中退、してたなんてな。
意外だな。
何かあったのか？
この人に限って？

「住み込みで働いているんだ。普段は出ることなんて滅多にないからね。それをふまえて感謝してほしいわけだ☆」

「んじゃ、ありがとうございます。で、話って？」

☆……。
じゃなくて。
真黒さんはやけに改まって、言う。
今さら俺に話すことなんて、あるのか？
わからん。
全くもってわからんね。

「ああ、そうだね。それにしても元気そうでなによりだよ。君には世話になったからね」

「それはこっちのセリフですよ。感謝してるのは、俺のほうです」

全くもって、その通り。
感謝すべきは俺のほうだ。
真黒さんは確かに変態だが、どうしたって俺はこの人に感謝すべき立場なのだ。

「君が入学したと風の噂で聞いてね。馴染みとしては、顔くらいは見ておこうと思ってさ」

わざとらしく肩を竦める真黒さん。
黒神家特有のアホ毛がぴこぴこ揺れる。
クラスメイトの不知火といい勝負かな。

「……めーちゃんには、もう会ったんですか？」

「いや。まだ会いに来てくれないんだよ。何でかな？」

「じゃあ何で、俺のとこに」

「心配、といっちゃあ言葉が軽いが———何分最後に会ったのは何年も前だからね。色々聞きたいことや話すこともあるだろう？」

「……それは、」

俺がここにいることについてか？
俺がいつだって何もしてこなかったことについてか？
真黒さんにはそれを言う権利があるんだ。
それとも。

「第一に。君の———唯一、憎むべき“才能”についてだよ」

「……」

返すべき言葉が見付からなかった。

真黒さんは珍しく真剣な顔をしていて。
だからこそ余計に、どうしたらいいのかわからなくなった。
真黒さんが言う“それ”は。
俺がずっと“なかったこと”にしてきたことだから。

「僕は君に感謝している。君は僕の愛すべき妹を二度も守ってくれたからね。感謝してもしたりないくらいさ」

“だからこそ”と。
それでも笑いながら――――

「見たところ、これといって問題はなかったようだね。全く、宝の持ち腐れとはまさにこのことだよ」

「見たところ、って――――」

真黒さんは“普通（ノーマル）”だったはずだろ？
何でそんな結論付けたような言い方ができるんだ。

「そういや知らなかったんだっけ。どうやら僕にも“異常（アブノーマル）”と呼ぶべき才能（スキル）があったようでさ――――クラスメイトからは《理詰めの魔法使い（チェックメイトマジシャン）》なんて呼ばれていたよ！」

「いや、十分驚きなんですけど……《理詰めの魔法使い（チェックメイトマジシャン）》は明らかに嘘ですよね！？」

そんな恥ずかしい呼び名があるか！
こっちが恥ずかしくて堂々と呼べねーよ！

「《魔法使い》とは呼ばれていたよ？僕の異常性（アブノーマル）は簡単にいえば、

“解析”能力さ☆」

「解析……能力？」

「そう。僕自身の能力（スキル）なんて何てことはないけれど、他人のことなら話は別だ。だからね、緋色くん。君のカラダの様子なら、見ればわかってしまうんだよ」

楽しそうに笑っているが、それってすごいことだよな？
見ただけで相手のことが文字通り“解析”できる――――
いやはや、何て素晴らしいサイノウだろうな。
それこそ、“自分以外の誰かの為にある”能力だ。
流石はめーちゃんの兄、ということなのか？
あいつは、自分は他人の為に生まれてきたと豪語するような奴だからな。

「残念ながら君の“才能”のことは全くちっともわからないんだけどね。だがしかし、どうやら大分鍛えたみたいだね？緋色くん」

「う、」

ばれた。
誰にも言ってこなかったのに。
ばれてしまった。
なんだか恥ずかしいぞ。

「……それが“解析”ってことですか？」

「その通り。いやいや、関心したよ。よくそこまで“頑張ることができたね”。善吉くんだって顔負けの鍛え方だぜ、それは」

「あれ、善吉のこと知ってたんですか？……って当たり前か」
めーちゃんの幼なじみらしいし。
真黒さんが知っていても不思議じゃないか。
というか、知っていないとおかしい。
……この人に限っては。

「どうだい、彼も頑張っていただろう？昔、ちとキツイことを言ってしまったからね。まだ会ってはいないけれど、彼のことだ。努力を怠ったりするような子じゃないし、昔から真面目だったからね」

「確かに真面目で良い奴だと思いますよ、あいつは。妹さんのことは人一倍気にかけていた……みたいだし」

それは事実だ。
善吉ほど良い奴を俺は見たことがないし、善吉ほどめーちゃんのことを気にかけていた奴も珍しい。
こんなことを言ったらあれだが、真黒さんが思っている以上に人吉善吉という男は良い奴なのだと思う。
色んなことをひっくるめて、良い奴。

「で、本題なんだけど」

今からが本題かよ！
もう話とやらは終わったのだと思ったんだけどな。

「君はどうやらこの“鳥籠”に本格的に入ってしまったようだね――――まあ当然といっちゃあ当然か。そこで一つ忠告だ」

忠告？
とりあえずここが変な場所だってことは（真黒さんが侵入している時点で）もう十分わかったんだが。
今さら何を言われてもな。

「ここの連中は良い奴ばかりだよ。気のいい、好きになれるような奴ばかりさ。僕も古参メンバーとは面識があるからね。それは君にとっても良いことだと僕も思う。ただし」

それでも真黒さんは。
まるで家族を見ているかのように――――
笑って言うのだ。
昔と変わらない笑顔で、笑って言うのだ。

「十三組（アブノーマル）とはあまり関わらない方がいい――――君自身のためにも、君以外のためにも」

勿論、僕の愛する妹を含めてね――――
と。
だけどそれは。

「……多分、無理っすよ」

そう言うしかなかった。
だって、そうだろ？

第１０箱　「忠告だ」（後書き）

クラスメイトとお話しする予定です。

本作品に関して

誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております＾＾

第１１箱　「ラーメンも飲み物だよ☆」（前書き）

ちっちゃい子とお話します。
今回もよろしくお願いします。

第11箱　「ラーメンも飲み物だよ☆」

「……てな感じでな」

休日を挟んで、月曜の昼休み。
俺は善吉と二人で食堂に来ていた。

「そんなとこだったんだな……“鳥籠”」

「ああ。俺だってあんな風だとは思わなかったさ。……色々」

誰にも予想できないだろうなぁ。
あんな異様なテンションの寮なんて。
しかも真黒さんと顔見知りがいるってのも気になる。
一応明記しておくが、善吉には真黒さんと会ったことを伝えていない。
真黒さん本人に何故かはしらないが、口止めされてしまったのだ。

「けど、“鳥籠”には特待生（トクタイ）多いんだろ？」

「え、そうなのか？」

初耳だ。
あの人たち、特待生だったのかもしれないのか……
見えないな。

「ああ、俺も聞いた話なんだけど、あの寮から学校には来ないで籠ってるって奴もいるらしいぜ」

「そうなのか……通りで校則無視してる訳だ」
すごい外見（ビジュアル）だったしな。
眩しいくらい。
いいことなんだか、悪いことなんだか。
怒られないのかなぁ、とは若干思っていたわけで。

「にしても、お前物知りなんだな。俺が知らないだけなのかもしれないけど」

「俺が物知りなんじゃねえよ。俺の友達が物知りなんだ」

「友達……？」

やはり友達作りとかは得意なのか？
はやすぎだろ。
落ち込むだろうが。

「ああ。ていうか、同じクラスの……」

「あっ、人吉じゃーん☆なんか奢ってよ！」

食堂の奥の方から声が聞こえる。
どうやら人吉に声を掛けたみたいだが。
ていうか、聞いたことのある声だな。
善吉がそちらに向かって行くので、ついていく。

「不知火（シラヌイ）！いくらなんこの量はでも食べ過ぎだろ」

不知火、と呼ばれた小さな人物――というか同じクラスの不知火（シラヌイ）半袖（ハンソデ）は、積み上げられたラーメンの丼に囲まれていた。
まさか、この量を一人で食ったのか？
こんなに小さいのに？

「あひゃひゃ☆あたしの胃袋は四次元に通じてるんだよ☆ね、嘘神緋色くん？」

いきなり話をふられてしまった。
反応に困るって。

「毎日毎日よくこんなに食えるな。本当に四次元に通じてるんじゃないか？」

「毎日2？ラーメン飲むって決めたんだもん」

「ラーメンは飲み物じゃねえ」

あ、衝動的に。
不知火はアホ毛をぴこぴこ揺らしながら笑う。

「ラーメンも飲み物だよ☆飲めるもんはぜんっぶ飲み物さ。食える物も全部食べ物だしね☆」

「おいおい」

善吉がやれやれと言った感じで首を振る。
なんか面白い奴なんだな、不知火って。

「じゃ、俺達も買ってこよう。意外と上手いんだぜ、ここの飯」

「あ、ああ」

学食かぁ……。
初めてだな、学食って。
何食えばいいんだろう。

「あたしとしちゃあ、やっぱりラーメンがオススメかな？食べる？」

また心を！？
なんでこの学園の奴はみんな心を読むんだよ！

「あ、そうだ不知火。他に食いたいものあるなら一品くらい奢ってやるよ」

善吉が言う。
優しいねぇ、こいつ。

「だーいじょーぶだって！もう食ったしね☆はやく買いにいきなよ」

楊枝で遊んでいる不知火。
俺も行くか。

「そーだ、嘘神くん」

「なんだ？不知火」

「日之影先輩、大きかったでしょ？」

「え――――？」

あひゃひゃ、と不知火は笑う。
なんで、不知火が日之影先輩のことを？
もしかして、先輩の言ってた“気付いた”奴って……不知火？

「緋色ー、行こうぜ」

「あ、ああ」

不知火はやっぱり、楽しそうにあひゃひゃと笑っていた。

第１１箱　「ラーメンも飲み物だよ☆」（後書き）

本作品に関して
誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております＾＾

第１２箱　「寂しかった」（前書き）

不知火くん……
頼むから顔を見せてくれ！！

みたいな感じです。
今回もよろしくお願いします。

第12箱　「寂しかった」

「生徒会長、知ってるか？」

ふと気になって聞いてみた。
真黒さんと話して、異常（アブノーマル）には近づくなと釘を刺されー――
けれど余計に気になっちまうのが人間の性であり。
俺が約束をきちんと守るということは、余りない。

「生徒会長？誰だそれ」

うーん……
案の定、微妙なリアクション。
別に疑っていたわけでもないんだが、本当に誰も覚えていないらしい。
少なくとも今の答えどおり、善吉は何も覚えていなかった。

「そもそもこの学園に生徒会なんてあるのかよ？仮にあったとして、生徒会長なんてもん、どんな人がつとめてるかなんて考えようもないぜ」

「まあ、普通そうなるよな……」

日之影先輩の異常性（アブノーマル）っていうのは、本気（マジ）なものらしい。
異常（アブノーマル）か……

十三組生ってのは、みんなああなのなのか？

「変なこと聞いて悪かったな」

「お前がなんでこんなことを言い出したのかはともかくとして、生徒会長か……考えたこともなかったな」

急に考え出す善吉。

こうなってくると日之影先輩が可哀想だ。

誰にも認識されないなんて、そんな不便なことはないよな。

色々と面倒なんだな、異常（アブノーマル）ってのも。

或いは、“鳥籠”の先輩達なら……覚えているかも知れねえな。

「カッ、まあ居たとしても相当な奴なんだろうな。本当に想像がつかねえ」

「ああ……うん……まあ、な」

「なんだよ、どうかしたのか？」

「いや、別に何ともないって」

「何ともなくなどないだろう」

え？

俺でも善吉でもない、凛とした声が響く。

誰、なんて考える必要もなかった。

教室内、いや多分校舎内のほぼ全員が“彼女”への注目を余儀なく

されたのと同時に、“彼女”もまた堂々とした態度でそこに立っていた。
人の前にたつのが得意なんじゃない。
“人の上にたつのが得意な彼女”。

「久しぶりだな、善吉に“ひーちゃん”。私はこのような必然とも言える出会いに感激してしまったぞ！」

びしぃっと扇子を“俺と善吉に”向ける。
余りにも凛とした立ち姿に、何だか言葉が出てこない。

「えっと……何してんの、黒神さん」

善吉が冷や汗を流しつつ一言。

「そんなに他人行儀な呼び方をするな。昔のように“めだかちゃん”と呼ぶがよい！」

「……！！」

顔を真っ赤にする善吉。
ああ、照れてるんだな？

「それにしてもまさかひーちゃん。貴様が箱庭学園に入学していようとは思いもしなかったぞ。驚いてうっかり職員室にまで聞きにいってしまった」

いきなりターゲット変えられた……

ていうか、ひーちゃんとか連呼しないでほしい。
すげえ恥ずかしいから。
物凄く恥ずかしいから！

「ていうかめだ、く、黒神。お前緋色と知り合いなのかよ？そんなの聞いたことなかったんだが」

善吉は相変わらずの赤面状態。
口振りからして、善吉とクロカミサンはかなり長い付き合い……なのだろう。
クロカミサンは当然、といった表情で返答する。

「ああ、貴様が知らないのも無理はない。ひーちゃんとは“病院”で会って以来だからな」

「病院？……って、お母さんが働いてた？」

お母さん？

「うむ、そうなるな。だが善吉。貴様はひーちゃんを知らないはずだ」

「ああ、この高校で初めて会ったけど」

「無理もない。嘘神研究員は人吉先生が大嫌いだったからな」

え？
人吉先生……って。

「善吉、お前人吉先生……瞳先生の子供か！？」

「え、そうだ……けど。何でお前がお母さんのこと知ってんだ？」
人吉先生。
あの人吉先生か……
ていうか、クロカミサンが言っているのだから間違いない。
人吉瞳先生だ。
「俺の姉ちゃんが人吉先生と同じ職場で働いてて……餓鬼の頃よく遊んでもらってたんだよ。人吉先生に子供がいたこと自体、俺は知らなかったんだがな」
「私の専属研究員だったのだよ、ひーちゃんの姉上は」
クロカミサンが付け足してくれる。
そうか。
人吉先生の、ね。
どうりで良い奴な訳だよ。
「ともあれ、長い間会うこともなかったのだ。一度くらいなら良いだろう」
開いていた扇子を音をたて閉じるクロカミサン。
俺も善吉も何のことだかわからず、呆けた顔をしていた。
のだが。
その間は一瞬で砕かれる。
「寂しかったよひーちゃん！！！」

！！！！！！！！！
！！？！！！！？？！！！！

クロカミサンは、勢いよく“俺に抱きついた。”
てか苦しいしやばい状況だし胸が痛、痛いしいやいや待て！
「わかった！わかったから“めーちゃん”離れてくれ頼むから！」
「もう少し！」
ええー？
いや、マジで意識が……
「おい緋色！緋色ー！」
あろうことか、視界がフェードアウトしていった。
ただ、まあ。
嬉しかったのは違いないんだけど。
けれどやはり。
「泣くんじゃねえよ……クロカミサン」
泣きながら抱きついてくる女の子を余所に気絶すんのは格好がつかないし。
何より、勿体無い。
そんな下らない事を考えながら、俺は意識を失った。

第１２箱　「寂しかった」（後書き）

とにかく会話します。

本作品に関して

誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております＾＾

第13箱　「ていうかよ」（前書き）

やっぱり学ランが似合いますよね、あの人。

みたいな感じです。

今回もよろしくお願いします。

第13箱　「ていうかよ」

「起きろ、しっかりしろ緋色！」

「！？」

ばちばちと両頬を叩かれている、らしい。
痛みに耐えきれなくなり飛び起きる。
どうやら俺の頬をビンタしていたのは善吉のようで、俺の上から飛び下りる姿が見えた。
危うく頭がぶつかるところだった……。
善吉、ナイス反射神経。

「……一体何が起きたんだ？……っけ？」

「めだかちゃんがお前に抱きついたんだよ！」

「ん、あ、ああ……あー？」

そんなこともあったようななかったような。
記憶が飛んでいる、のか？
意識が朦朧とするんだが……

「ったくめだかちゃん！お前抱き付きで人殺す気かよ！」

善吉が頭を押さえつつ言う。

対するめだかちゃんもといめーちゃんもといクロカミサンは、それでも凛としたままで堂々と言い放った。

「そんなに騒ぐこともなかろう。それに私は“ひーちゃん”があの程度のことで死ぬわけがない、とよくよくわかっておるからな」

そんなに買い被るなよ。
あんまり嬉しくないし！

「んなこと言ったってよ……事実緋色は気絶してたし」

悪かったって……
ありがとう善吉。
お前はちゃんと俺のことを心配してくれるんだな……！
感激するぜ。

「俺ならもう大丈夫だ。ありがとう善吉」

若干咳き込むけど、このくらいなら大丈夫だろ。
制服についたゴミを払いながら立ち上がる。
えらい目にあった。
うん。
まさか抱き、抱き付かれるとは……
思ってなかったというか……
って何で俺が照れなくちゃならないんだよ！
やっぱめーちゃんといるとペース狂いまくりだ！

「それはそうとひーちゃん。嘘は良くないぞ。全く、何がなんでもないだ」

「？何のことだ？」

クロカミサンは真っ直ぐ俺を見て、一言。

「日之影会長のことだよ」

「……！！」

日之影会長――――

箱庭学園の生徒会長。

日之影先輩の異常性（アブノーマル）は、“他人に認識されない”というものだ。

だからさっきの善吉のように、大半の奴は日之影先輩に“気付かない”。

いや、“気付けないんだ”。

それは日之影先輩本人が言っていたことなので間違いない。

それに先輩は言っていた。

“入学式で俺に気付いた奴は、お前を含めて2人だけだ”――――と。

何故かはわからないが、俺は先輩に気付いたし、忘れなかった。

けれど、不知火もそうだった……っぽいし。

じゃあ、何でめーちゃんまで？

先輩が“先輩を認識したもう一人の人物”に気付かなかったということなのか？

いや、めーちゃんの存在に“気付かないわけがない。”

誰しもが目を引くような、そんな存在なんだ。

だとしたら、例外（イレギュラー）なのは不知火なのか？

……わかんねぇ。

よくよく考えると、めーちゃんが異常（アブノーマル）に気付かないわけがないんだよな……
んー……。

「まさか気付いていないわけではあるまい？というか日之影会長自ら仰っていたのだから間違いない。貴様も日之影会長を“認識”していたのだろう」

「え、お前日之影先輩に会ったのか？」

「それを無理に誤魔化す必要がどこにある。そんなのは日之影会長に失礼だろう」

「無視？今俺無視された？」

「ああ。されたな」

「少し会わない内にそんな風になってしまっただなんて、ひーちゃん、私はすごく悲しいぞ。悲しくて泣いてしまうぞ」

「何だ、俺は脅迫されてんのか？」

「間違っちゃいないな」

「……今は致し方ない。ともかくひーちゃん、善吉。私は貴様らに重要なことを言いに来たのだよ」

「「はい？」」

俺と善吉の声が重なった。

俺と善吉の二人に用があったのか……
って二話跨いでまで言いに来たんだから、相当重要なことなんだよな？（……メタ発言だ）
めーちゃんは俺達を順番に見つめつつ、言った。
勿論堂々とした表情と声色で。

「私は生徒会選挙の“会長”に立候補しようと思う！」

……。
……え？

「「えええええ！？！？」」

余りの驚きに、善吉とほぼ同時に机を叩いて立ち上がってしまった。
突拍子もなさすぎる。
生徒会選挙、って……
まだ入学したてだぞ、俺達。

「日之影会長直々にお願いされてしまったのだ。断るにも断りきれなかったし、出馬するしかなかろう」

「！？会長直々って……」

「言葉通り、日之影会長に直接頼まれてしまったのだ」

もうびっくりとしか言えねえよ！
しかし何だって日之影会長はめーちゃんに……
こんな入学したばかりの一年生に、会長職を任せようとするんだ？

えー？
何かもう何もわからなくなってきた。
「ていうかよ」
善吉が困惑した顔で言った。
何だ？
「さっきから言ってる“日之影会長”って――――誰だ？」
「「……」」
今初めてめーちゃんと通じ合えた気がしました。

第１３箱　「ていうかよ」（後書き）

本作品に関して
誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております＾＾

第１４話　「黒神めだかの為の」（前書き）

不知火ちゃんを書きたいが為の。

みたいな感じです

今回もよろしくお願いします

第１４話　「黒神めだかの為の」

「生徒会選挙～？」

一年一組教室内。
善吉がめーちゃんに拉致られたため（服を決めるだのなんだの言っていた）、俺は暇そうにパンを頬張っていた不知火に話を聞いていたりする。
ちなみにこいつはいつでも食べ物を持ち歩いている。

「確かにあるね。急遽決定した箱庭学園生徒会総選挙☆何でも現会長である日之影先輩直々の申し出らしいじゃあないですか♪」

「会長直々……って、日之影先輩が選挙を提案したのか？」

「いやぁ、選挙自体は元々あるんだけどね？申し出たのは“黒神めだかの出馬許可”だよ♪」

めーちゃんの出馬許可、か……
ていうか、マジな話だったのか……
流石は不知火。
物知りだなぁ。

「ふつーに考えて１年生が選挙に出られるわけないしね。一応言っとかないと不味いんじゃない？この選挙は“黒神めだかの為のものなんだから☆”」

「？……どういう意味だよ？」

「さぁーね♪」

誤魔化された。
よく意味がわからない……
こいつも、何でこんな意味深な言い方するんだ？
めんどくさいだろうが。

「あひゃひゃ☆それにしてもさぞかし大変なんだろうねねぇ緋色クンは。黒神サンに散々振り回されてるんでしょ？」

「それを言うんなら善吉の方が気の毒だ。俺なんてまだマシな方だぜ」

「そっかー。けど付き合いは緋色クンのが長いんでしょ？」

「ん、ああ。だけど随分会ってなかったしな。善吉の方が頼りになるんだろ」

すると不知火は一つめを完食したのか、新しいメロンパンをどこからともなく取り出してかじりつく。
食べ物専用の四次元ポケットでも持ってるのか？

つまらなそうにパンを食しつつ、それでも俺との会話を止めようとはしない。
ありがたいことなんだけどな。

「ふうん。どうだかね？」

「……少なくとも俺なんてただの一般生徒だ。めーちゃんに付き合えるほど、頑丈じゃない。暇だけどな」

「それなら人吉だっておんなじさ。あいつはどう頑張ったって、どんなに努力したって普通（ノーマル）なんだからね☆」

不知火、楽しそうだな。

何だかんだ言っても、やっぱりこいつ善吉のこと、嫌いじゃないんだ。

善吉のことを話すときは、何となく楽しそうだ。

……めーちゃんについて話すときは嫌そうな顔してるけど。

「いやいや、あたし別にあいつを誉めてるわけじゃないし」

「なんつーか、そういうんじゃなくてさ。やっぱお前楽しそうなんだよ」

「それを言うなら、緋色クンだって黒神サンの話をするときは顔がにやけてますが？」

「嘘をつけ！」

「ほんとだよ～」

るんるんといった感じの不知火。

ま、まさか本当ににやけてるのか……？

心配になってきた。

「めーちゃん、って呼んでる辺りが特に♪」

「信じたくねぇ！」

「はっはっはー、鏡を見たまえよ嘘神クン！！」

「既に手鏡持ってんのかよ……」

用意周到過ぎる。

狙ってやってんのか？

……いやいや、大丈夫。

にやけてないにやけてない。

「ひーちゃんめーちゃんだなんて仲良しですねぇ☆あたし憧れちゃーう」

「それについては安心しろ。めーちゃんには、俺のことは普通に緋色とか嘘神って呼んでもらうよう言っておいたからな」

二人きりの時だけはどうしてもと聞かないので許したんだが……

人前でひーちゃんは流石に恥ずかしい。

俺は健全な高校一年生だ。

「憧れてたんなら悪かったな」

「嘘だけどー？」

「したり顔やめろよ！」

にしし、と笑う不知火。

それ、別のキャラの口癖だろ。

「あのクロカミサンと仲良くお喋りできてるんだもん。既にすごいんだよ☆って思われてるんだろーね。周りの人に！」

「他人事だな、お前……」

「あひゃひゃ☆」

また誤魔化されたし。

なんだよもう。

「ていうか、何か遅くないか？あいつが時間守らないなんて珍しいな……」

黒神は１０分で戻るとか言ってたんだよな……

無理だとは思うけど、黒神は約束を守る。

だからそろそろ戻ってきてもいいとは思うんだが。

「確かに遅いね。見に行ってあげれば？」

「やっぱそうか？あいつら、どこにいったのかわかるか？」

「家庭科室じゃないかなぁ？手芸部のとこいったんだと思うよ」

「そっか。ありがとな」

席から立ち上がっていざ家庭科室へ向かおうとする。

が、不知火に止められた。

袖をつままれた。

「お・れ・い・は？」

「……放課後、お好み焼きでも食いにいくかなー」

「乗った！」

ハイタッチ。

そんじゃ、改めて向かいますか。

第１４話　「黒神めだかの為の」（後書き）

本作品に関して
誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております＾＾

第１５箱　「わかればいいんだ」（前書き）

物凄い間開いてしまい申し訳ありません・・・！！
しかも進まない…進まないよ！！

第15箱　「わかればいいんだ」

不知火に貰ったポッキーを数本食しつつ、廊下を歩く。
しかも極細ポッキーだ。

……。
やべ。
……家庭科室、どこなのだろうか。
わからん。
わからないまま出てきてしまった。
今さら教室に戻るのも恥ずかしいぞ……
不知火（あいつ）は絶対に馬鹿にするぞ……

困った。
いやぁ、困った。
まだまだ校舎内の構造なんて把握していない。

まあ、そのうち着くだろう。
ぶらぶら歩くことにするか。

「ん？」

前方に注目。
何やら不良に誰かが絡まれている模様。
今時そんなことをする奴も珍しいよな。

ったく、助けようにも俺にはそんな勇気も力もないんだ。
悪いね、主人公要素なくてさ。
さりげなく立ち去ろう。
もう面倒事に巻き込まれるのは、ごめんだからな。
「過去の失敗を繰り返さないように――――ってあれ」
あれは確か……
同じクラスの無理原さん。
どうやら絡まれていたのは無理原さんだったらしい。
助けたいのはやまやまだが、仕方ない仕方ない。
どうせ俺はヘタレですよ――――

「うおりゃぁぁあ！！！！！！！！」

不良の派手な頭に照準を定め、数歩下がって飛び蹴りを食らわせた。
反動が足に伝わり、コケそうになるが何とか持ちこたえた。
ふう。
よく吹っ飛んだなー。
「え、え？……きょ、きょこう……くん？」
「やあ無理原さん。大丈夫だったかい？」
爽やか笑顔。
こういうのは印象が大事なんだよ。

「いや……あの、えっと」

「いやいや、俺ならいいんだ。無理原さんに怪我がないならそれでいい」

「そうじゃなくて……今のひとは……」

がんっ

と、脳内に衝撃が響く。

脳が揺れている。

「いってぇ！」

「それはこっちのセリフだ！何人の頭に飛び蹴りかましてんだ手前（てめえ）……あん？日頃のイライラとかぶつけてみたのか？ふざけんじゃねえお前人の頭は蹴っちゃいけねえって教わんなかったのか！ああそりゃあ残念だったな！だったら覚えとけ人の頭は蹴っちゃいけねえんだよ！！わかったかこの野蛮人がぁぁああ！！」

「……すいませんでした」

「わかればいいんだ」

謝る以外に選択肢が見付からなかった……

あんなに怒られたのは久しぶりだ……

「きょうくん……助けようと……してくれたん……だよね？」

「いや、まあそうなんだけど。すまない間違えたな。俺の勘違いだ

ったんだよな！」

「ハッ！俺はこいつの兄貴だ。早とちりすんじゃねえよ」

兄貴……

あ、あーねー。

ほんとに俺の早とちりかよ。

恥ずかしー。

「お兄ちゃん……このひとは、同じクラスの……きょこうくん。きょこうくん、ごめんね……痛かった……よね？」

「元はといえば俺が悪いんだ。大丈夫だよ、無理原」

「しっかし、俺を蹴りやがったのは気に入らねえが、妹（こいつ）を助けようとしたことは認めてやってもいいな。あー、きょこうだっけか？」

「嘘神緋色です。ほんとすいませんでした。マジですいませんでした」

滅茶苦茶頭を下げる。

すげえ怖かったんだよ、この人。

顔とか。

「無理原だ。3年のな。下の名前は無慈悲。てかお前、嘘神ってことは……嘘神ちゃんの親戚かなんかか？」

「嘘神ちゃん？」

「3年の教師」

「ああ、弟です。多分その嘘神の」
「成る程な。嘘神なんて名字は他に聞いたことねえしな」
「ほら……お兄ちゃん、きょこうくん……忙しそうだから……」
「あ、すいません」
「ああ。悪かったな。頭大丈夫か？」
「いえいえこちらこそ。じゃ」
「ごめんね……きょこうくん……」
逃げるように立ち去った。
……軽くトラウマになりそうだ。
恐ろしい人もいたもんだな……
あの人、姉ちゃんを知ってたんだな。
3年担当だったのか。
知らなかった。
まあとりあえず色々あったが、家庭科室家庭科室。
＋＋＋
家庭科室……なのか？
ていうかこれはもう……

残骸。

としか、言い様がない。

鉄屑やら何やらが、そこらじゅうに転がっている。
なんだこりゃ？
どうにか頑張って来てみたはいいが、どういった状況なのか全くわからない。

「嘘神か？」

「！！」

振り向くと、そこにはそれはそれは巨大な――――つまり日之影会長がいた。
びっくりするなぁ。
確かに、認識“しにくい”ようだ。
できているだけ、マシなのかもしれないが。

「どうしたんだ、こんなところに何か用でもあったのか？」

「いえ、ちょっと黒神と善吉を探してまして」

「黒神か。善吉ってのは、人吉のことだろう？あいつらならとっくに教室に戻ってるよ」

「そうですか。ありがとうございます。……あの、この教室どうし

たんですか？」

「ああ、これな。あいつ……やり過ぎるんだよな」

「あいつ？」

「雲仙冥利。風紀委員会の委員長なんだが……」

風紀委員会？

その風紀委員会が、どうしてこんなことをするんだ？

「今回は教室をぶっ壊すぐらいだったからよかったが。とりあえず“注意”はしておいたし、大丈夫だろ」

「……」

雲仙冥利。

まあ、きっと何人かでこんな風にしたんだよな……

怖い怖い。

そんなに怖い奴もいるのかよ。

恐ろしいな。

「それじゃあな、嘘神。また会おうぜ」

「あ、ちょっと待ってください。会長、あなたが黒神を推薦したってのは……」

「本当だぜ。俺は黒神に、生徒会長を任せようと思う」

「任せるって……」

「あいつなら、俺よりよっぽどいい生徒会長になるだろうよ。俺はもう少し続けるつもりだったんだが……あいつがやった方が、学園の為になりそうだ」

そういう日之影会長は。

嬉しそうでもあったし、寂しそうでもあった。

だが、それ以上に。

会長は、楽しそうだった。

なら、問い詰める必要もない、か。

「じゃあな嘘神。お前はどうせ黒神に協力するんだろう？頑張れよ」

「はい、ありがとうございました！」

頭を下げる。

生徒会選挙、頑張らなくちゃいけないようだ。

第１５箱　「わかればいいんだ」（後書き）

ていうか日之影会長ですぎですよね？

本作品に関して

誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております＾＾

感想いただけたら執筆速度もＵＰするかもしれないかもです（しろよ）

第１６箱　「当たり前だろ」（前書き）

大分お久しぶりです。

第１６箱　「当たり前だろ」

生徒会総選挙、立候補者一覧。

というものを不知火からいただいた。
めーちゃん会わせ、計１５人程の人間が名前を挙げているようだ。
今回行われるのは会長職の選挙のみ。
ていうか、黒神が会長になったりしたら、他のメンバーなんて集まらないと思うんだが……

「カッ！おいおいあいつ、普通に見たって一番異例じゃねえかよ」

「そりゃあそうだろ。一年生で立候補なんて黒神しかいねえよ。ていうかできないんだっけ？」

「けどやっぱり、一際異色を放ってるよな。これを見てる人達の反応が目に浮かぶようだ」

「黒神めだかなんて、よく知らない人が多いからだろ？まあ実家があれだから、聞いたことくらいはあるだろうけどさ」

黒神の実家は、馬鹿みたいな金持ちだ。
世界を担う黒神グループといったら知らない奴はいない。
そんな家の養子が、黒神。
兄と姉を持っていて、兄の方は言わずと知れた変態、黒神真黒さん。
姉のことは知らない。
家出したらしい。

あんな豪邸のような家から家出したって、良いことなんかないと思うんだけどな……
小さい頃、黒神から直接聞いたので覚えている。
まあいくら“黒神”の姓が知れた名であったとしても、黒神めだか本人の手助けには余りならないのだと思う。
寧ろめーちゃんは、自らの姓に勝たなければいけないのだ。
けどまあ、黒神本人について知っている奴も、多いんだろうな。
離れていた頃の俺の耳にだって、入ってきていたんだ。
そりゃあもう信じられないようなニュースと共に。
「俺達は1年だからよく知らないけどよ……この人達は3年だろ？そんな中で支持率とるのは難しいんじゃないのか？」
「普通に考えればそうなんだよ。“普通”に考えればな。けどさ、“あいつは黒神めだかだから”」
善吉は、少しだけ口元を笑みに歪ませて言った。
けど確かに、その通りだ。
「お前の、幼なじみだしな」
「そりゃ緋色、出会ったのはお前のが先だろ」
「一緒にいた時間は、お前の方がずっと長いよ。いくら出会いが早くったって、時間が足りなきゃ意味なんてない。俺は一緒にいなかった。これっぽっちもいなかったんだ。だからあいつが頼るのは――間違いなくお前だ」

「……」

「てなわけでさ。俺達も頑張ろうぜ、善吉」

笑ってみた。
なんだか昔を懐かしむような気分で―――
自然に笑えたような気がした。
真黒さんはああ言ってたけれど、突き詰めて考えてみれば、黒神を放っておけるわけがないんだ。
黒神が俺を放っておかないように。

「当たり前だろ」

やっぱりこいつ、黒神のこと好きなんじゃねえか？
笑顔が素敵すぎだろ、おい。

「ボーイズラブは頂けない」

「うぉっう！？」

うわぁぁ、いつの間にか肩に手が！
寒気が一瞬にして全身に痺れを走らせる。
ほんとに心臓に悪い！
寿命が確実に縮んでいっている！

「って、弓矢先輩じゃないすか……」

「何だ、その目は。通り掛かったらお前が騒いでいるから、少し声かけてみただけだ」

そういう光鎚弓矢先輩は、袴姿だった。
……部活か？
「何を見てるんだ？……選挙？」
「俺の知り合いが立候補しまして」
「そうか。誰だ？」
「この……“黒神めだか”って奴です」
名前を指差しながら。
弓矢先輩は無表情だったが、うんうんと頷いて、
「わかった。俺の票もこいつに入れよう」
「え、本当ですか？ていうか、いいんですか？」
「ああ、別に構わない」
「ぶっちゃけると？」
「誰でもいいから、だな」
正直な人だった。
……すげえ正直だ。
そんな袴姿の弓矢先輩は、何というか……
似合っていた。
金髪で見るからに不良寄りなのに、袴がやけにマッチしている。

「……ああ。今から部活でな。弓道場に向かっていたから、袴」

「成る程」

やっぱり部活だったのか。

弓道部か。

暇なときに部活を見てみるってのも、いいかもな。

「それじゃあ、また寮でな」

「はい」

ショルダーバッグを担いで歩いていく弓矢先輩。

そしたら善吉が不思議そうな顔をして言った。

「……もしかしてあの人、光鎚弓矢か？」

「ああ、そうだけど。“鳥籠”の人だぜ。どうかしたのか？」

「いや。この学校にいたんだな、って思ってよ」

「？そりゃどういう意味だ？」

「有名な人だろ？弓道では日本一狙えるような技術持ってるって、中学ん時聞いてたぜ。赫喰（カクショク）中学は知れた名だったよ」

弓道、か。

有名な人だったんだな。

そういえば“鳥籠”には特待（トクタイ）生多いらしいし。

弓矢先輩は弓道――――つまり部活の方、十一組（スペシャル）、体育科の生徒だっ

たってことか。

「いや、それだけじゃなくてさ――――悪名みたいなもんも、結構聞いてたんだ」

「悪名？」

そりゃ見た目は不良だけど。

弓矢先輩はそんな悪い奴に見えない。

寮のことでわからないことは教えてくれたし――――少なくとも副寮長（ミギハヤミセンパイ）よりはわかりやすく教えてくれた。

むしろ良い人だと思う。

「あの先輩に限ってそんな――――」

「今はどうだか知らないけどよ。昔というか中学時代は、喧嘩みたいな暴力事件も起こしてたらしいし」

「そうなのか？それこそ意外だな」

同時に、やはり善吉は物知りなんじゃないかと思い始めた。

俺が知らないだけか？

「ああ。確か同じ学校の“無理原無慈悲”って人と何回も暴動起こしてたって――――」

……無理原、無慈悲？

って、無理原の兄貴じゃねえか！

あの怖い人！

高一男子が本気で怖がるような先輩！

弓矢先輩、顔見知りだったのか……
仲悪ぃんかな……
確かに全く合わなそうなタイプだったけど。
「本当、お前よく知ってるな……。弓道でもやってたのかよ？」
冗談半分で聞いてみる。
善吉が弓道やってるところなんぞ想像できなかったけどな。
「いや、やってねえよ。中学時代は———色々、大変だったしな」
「そうか。まあ、そうなんだろうな」
黒神と一緒にいる限り、大変じゃあない時なんてないんだろうなあ。
———なんて、俺は軽く考えていた。
中学時代、あいつらに何があったのかなんて知っているわけがない。
だけどこの考えがあまりにも無責任だったと気付くのは、先の話。
「にしても弓矢先輩がなぁ……帰ったら聞いてみるか。って善吉、もう黒神来てるんじゃねえか？」
「あ、ああ。そうだな。教室戻るか」
この時はまだ、俺達を“あんな展開”が待ち受けているとは———考えてもみなかった。

第１６箱　「当たり前だろ」（後書き）

更新が亀より遅くて申し訳ないです……

本作品に関して

誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしています＾＾

第17箱　「助けようとは」（前書き）

溜めていたのを放出してます。

そんな感じで、今回もよろしくお願いします。

第17箱　「助けようとは」

ばちばちばちばち。
という効果音が聞こえてくるようだった。
あいつらの間を稲妻が走っているのが確かにわかる……

「うむ。それで不知火同級生、貴様は私のどこが気に入らん？別に嫌うのは構わないが、あからさまに敵意を見せるというのは如何なものかと思うのだが」

「べっつにぃー？あたしがいつあなたが嫌い、だなんて言いました？あたしはあなたにそんな感情は持ってませんよ☆だからといって好きってわけじゃあありませんけどね」

「それは私も同感だな。貴様とのまともな会話はこれが初めてなのだから。確信できるほど、貴様のことを分かっているつもりはないよ」

「あひゃひゃ☆あたしもあなたのことなんか全っ然これっぽっちも分かってませんからねー。仕方ない仕方ない！」

「ところで不知火同級生。実は貴様に折り入って相談があるのだが」

「お嬢様があたしみたいな奴に相談？いやだなぁ、よしてくださいよ☆“あたしはあなたを助けようとは思わない”。第一、あたしら仲良くないですし♪」

「仲良くなければ相談してはいけないのか？それは違うだろう。これは、仲が悪い貴様にこそ聞いてもらいたい相談事なのだ」

「余計に嫌んなっちゃうなー。まあ、言うってなら聞きますけどね？」

仲悪いのは否定しないのかよ。

「実はだな――――」

ごにょごにょごにょ。
全然わからなかった。
なんだよ、ガールズトークか？

「……というわけなのだが」

「あひゃひゃ☆お嬢様、それ本気ですか？面白そーだから協力してあげますけど♪」

「そうか。ありがとう不知火同級生」

「でもでもー、あたしは教えたげること以外は何にもしないですからね。てゆーかできませんし？」

「無論、わかっている。私はその点においては貴様を信用しているからな」

「それはよかった☆」

「ところで。そんなところで何をしている緋色？先程から貴様の赤

髪が視界に入り込んでいるのだが」

「気付かれてた！」

ついでに俺の外見設定が明らかになった！

１６話で！

「いや、お前らがやけに楽しそうに話してたからさ……出ていきにくくなっちまって」

「楽しそうには話してなかったけどね？」

なんで急に仏頂面になるんだ、不知火。

そして何故黒神もそれに続く。

俺に会話を邪魔されたのが不満なのか？

「ん、そういや善吉はどうしたんだよ。お前と善吉が教室行ったって聞いたから戻ってきたのに」

あの後———

日之影会長と話した後。

どうやら二人は家庭科室が破壊される前に教室に戻っていたらしいので、俺も後を追うことにした。

結局、どうして家庭科室があんな風になってしまったのかは分からずじまいだった。

“雲仙とやらが”“なぜか”“家庭科室を破壊した”

くらいのもんだ。

黒神は知ってんのかな……

まあ、いいか。

「善吉なら、度会(ワタライ)三年生のところへ出向いてもらっている。家庭科室にはいらっしゃらなかったのでな」

「度会三年生？手芸部の人か？」

「度会布地(ワタライヌノジ)ー！箱庭学園の三年生、手芸部副部長！芸術系の特待生で、三年十二組所属！数々の手芸コンクールで優勝、人柄も良くて人望も厚い！頼み事をするにはベストな相手ですな♪」

「へー、そうなのか。すげえ不知火、お前は何でも知ってるな」

「何でもは知らないよ、知ってることだけ☆なーんちゃって！」

ハイタッチ。

他作品のネタだっつーの。

振ったの俺だけどさ。

まさかのってくれるとは思わなかった。

映画化おめでとう。

「で、善吉は何をしにその、度会先輩のとこにいったんだ？」

「来る生徒会選挙用に新しく制服を新調しようと思ってな。度会三年生ならば注文するよりはやいだろう」

「わざわざ新しくしなくてもいいんじゃないか？」

「何事にも心新たにせねば立ち向かえん！まずは身なりからだ」

「そうかいそうかい」

別に否定するわけじゃないしな。
度会先輩も、それだけの為に服作りをしなきゃならないなんて、いい迷惑だと思うんだが。

丁度俺が両手をひらひらと振っていたときに、教室の扉が開いた。
振り向く俺と黒神。
不知火は新しいポッ〇ーを取り出すのに忙しいらしかった。

「お、善吉。戻ってきたのか。ん……それは？」

予想通りというか、教室に入ってきたのは人吉善吉だった。
手で何か抱えている。
なんだ？

「緋色、お前も戻ってきてたのか。いなくなってたからどこいったのかと……って不知火と黒神が相向かいに座っている！なんだこの状況！」

ナイスリアクション。
黒神、そんな顔すんな。

「ご苦労だったな善吉。さすが度会三年生。今度改めてお礼を言わねばならないな」

そう言って善吉から包みを受けとる黒神。
いやだから、それなんだよ。

「ふむ。よくできているな」

取り出したのは――――
真新しい制服。
若干アレンジが加えてある。
「いやぁ、度会先輩はほんと凄かったぜ。話をしたとたん、物凄いはやさで“制服を一着つくっちまうんだから”」
「え、そんな――――ものの十分くらいでってことか？」
善吉が出ていった時間を考えると、単純にそういうことになる。
さすがは特待生、といったところか。
何かもう、何でもありだな。
「ではさっそく着替えるとするか！」
振り向いたらそこには既に上下共に下着姿となった黒神さんがって
オィィィイイイイ！？
「何をやってんだお前はー！！」
「何を取り乱している？着替えると言っただろうが」
「何でもないような顔をするな！！お、お前よく考えてみろ。ここは教室だ。更衣室じゃないんだよ！運よく俺たち以外誰も居なかったから良かったものの……」
「時と場所を考えろ！不知火、ケータイ構えんじゃねえ！」
顔を赤くして叫ぶ善吉。
続いて俺。

こいつの露出癖は半端じゃない。
とにかくすぐに脱ぎだす。
周囲からすればかなりのいい迷惑……なのだったのを忘れていた。

「……不知火。保存した写メは消せよ？」

すると案の定奴は何枚か保存していたらしく、

「いーじゃんいーじゃん、お嬢様も満更でもなさそうだし☆」

「黒神も笑顔で頷くな」

まあなんやかんやで結局、俺と善吉が教室から追い出されるはめになるわけだが。
いくら幼なじみだと言っても、高1女子の生着替えを見てしまうわけにはいかない。
……と、極めて健全な俺は思うわけだ。
うんうん。

「では不知火。よろしく頼んだぞ」

「りょーかいしました☆」

暫くして、不知火が教室から出てきた。
いや、何故お前が先に出てくる。

「それじゃお二人さん、頑張ってね～」

人を喰ったような顔で、どこから取り出したんだか棒つきキャンディーを舐めながら、不知火は何処かへ行ってしまった。

続けて、黒神が出てくる。
真新しい――――制服を身に付けて。
「では善吉、緋色。行くとしようか」
「あ？どこに？」
「何で俺も？てかどこに？」
ほぼ同時に聞き返す俺と善吉。
黒神はやはり威風堂々と、高らかに宣言した。
「演説だ！」

第17箱　「助けようとは」（後書き）

作者は不知火が好きすぎますね。

本作品に関して
誤字脱字・感想・アイデア等お待ちしております^^

第１８箱　「それでいいんだから」（前書き）

ものすごーくお久しぶりです。

作者は受験生故、不定期更新が否めません。

ご了承下さい。

という訳で今回もよろしくお願いしますっ

第１８箱　「それでいいんだから」

「貴様達の夢は貴様達の所有物だ。自ら挑み自ら叶えよ！しかし貴様達の悩みは、私の所有物だ。ひとつ残らず私に貢げ！」

クロカミサン、演説中である。
確かにインパクトはあると思う。
黒神にとってこの選挙は明らかに不利なものであり、これくらいはやっとく価値はあるだろう。
だがしかし。

「それとこれとは全く関係ねぇ……！」

問題は演説の場所にあった。
議論すべきであろう、黒神が選んだ演説場所は。

「――――うむ、たしかにこの屋上からならばよく見渡せるな。良い提案だったぞ、緋色」

そりゃ、どうも。
――――言葉通り、場所は屋上である。
屋上。
めちゃくちゃ寒い。
箱庭学園の敷地面積は馬鹿みたいに広い。
入学してから結構経ったが、全てを把握しきれていないほどだ。
だから黒神は、一番目立つ屋上を選んだ。

というか、三人で提案し合ったのだが、本当に選ばれるとは思ってもみなかった。
確かにここは目立つし、マイクのスピーカーさえどうにかなれば、遠くまで声も響く。
その際に俺は黒神から依頼を受け、半ば無許可で“鳥籠”の巨大スピーカーの回線を拝借させて貰った。
無許可とはいっても、右速水先輩には話を通してあるので問題ない。はず。
ったく、ただの男子寮には絶対要らないサイズのスピーカーだよなぁ、コレ。
明らかに通常とは規模が違う。

「“ただの男子寮”じゃ、ないからだろ」

「確かにその通りなんだがな……あー、改めて言われるとさすがに溜め息がでるぜ」

俺は平穏に三年間過ごせれば十分なのに。
はっはっはー。
そのモットーに乗っ取って言えば、あの寮の存在は完全にアウトだ。
実際に生活すればわかる。

「カッ、にしても、あんな上から目線な演説で好感度が上がるものなのか？端から見てるこっちからしたら、普通に心配になっちまう」

確かに、さっきから黒神の演説内容といえば、いつもの通り大胆不敵、威風堂々な清々しいほどの上から目線。
黒神だからこその、演説。
そんな演説は嫌だ。

「あれこそが黒神めだかの真骨頂――――みたいなもんだろ。根っからの性格なんだしな。それにどれくらいの奴が賛同してくれんのかは、微妙だけどよ」

まあ言ってしまえば、本当は演説の内容などさして問題じゃあない。黒神が何かを言えば、嫌だって目が釘付けになる。あいつに注目せざるを得なくなる。

そういうもんだ。

黒神めだかは、そういう人間だってこと。

「黒神めだかの真骨頂、か……」

そういえば。

会長に就任する際には、いくつかの公約を約束する必要がある。行事の開催とか、美化運動とか――――そういった類いのものだ。その公約をもとに演説する必要もあるらしいのだが（不知火談）。黒神は、所謂“目安箱”の設置というのを提案した。

“目安箱”というと、江戸時代、徳川将軍が設置したというあれのことだ。

黒神は意見箱として、“目安箱”――――言うならば“めだかボックス”の設置を、約束することにしたらしい。

人の役に立ちたい。

他人を助けたい。

その為の、目安箱。

実に黒神らしい提案だ。

「で、あいつの言ってた“目安箱”ってのは、実際どういうもんなんだ？ご意見番みたいなもんなのか？」

「いや、ご意見番は何か違う！……要するに生徒の意見やら悩みや

らを書いてもらうってシステムなんだろ？」

「あー……な。そんな感じになるわけか」

まあ、まずは会長にならないと話にならない。
俺だって、サボってるわけにはいかないんだ。
今はこのスピーカーを支えるという役目を全うしようじゃないか。

「じゃ、頑張れよ緋色。俺は下の方行ってるから」

「ああ。また後でな」

階段の方へと向かう善吉。
あいつも何だかんだ言いながら、よくここまで協力してやるもんだ。
人のことは……言えないけどな。
長い付き合いらしいし。
……待てよ。
俺が黒神と初めて会話したのは確か、小学校前だ。
そこから中学になるまでは、繋がりはあった。
けれど学校も別だったり、“こっち”も色々あったりで、あまり会うことはなかったんだよな。
善吉とは面識くらいあってもよかった気もするんだが。
これもまた１つの運みたいなもんか？
小学校時代。
そして、中学校時代。
中学校時代なんて、黒神とはほとんど会っていない。
真黒さんとは、一度だけ会った。
最悪の、再会だった。
けれどあんな別れ方をした後でも、変わらず接してくれる真黒さんは、やっぱり良い人なのだろう。

なんて、俺は物思いに耽っていた。
のだが。

「よう。頑張ってるか？」

背後、じゃないな。
真横から声。
巨大も巨大、とてもじゃないが高校生とは思えないような図体。
当たり前だが、日之影会長だった。
日之影会長はまるで涼しい顔をして、うまくバランスを取りつつ俺の横に座る。

「お久し振り――――でもないですね。えーと、こんにちは日之影会長」

「おう。中々頑張ってるみたいだな、嘘神」

そりゃあ、頑張るって言っちまったからな。
諭したように、会長は笑う。

「俺としちゃあ、黒神に当選してもらわなきゃ困るんだけどな。あの演説も。成る程、あいつらしいな」

いやいや。
確かに、そうですけど。
黒神らしいことこの上ないけれど。
あいつ以外がこんなこと言っていたら、ドン引きだ。

「あ、そうだ。会長」

良い機会だ。
この間聞きそびれたことを、聞いておこう。

「なんだ？」

「この間も聞いたかもしんないですけど――――どうして会長は、そんなに黒神（あいつ）を推すんですか？会長がもう一年やるって選択肢も、あったはずなのに」

ずっと気になっていた。
会長が、ここまで黒神を推す訳を。
少なくとも、俺には二人が簡単に和解するようなタイプではないように思えた。
会長も、どちらかというと黒神のようなタイプだと思う。
だからこそ、解りあうような関係からは、遠いはずなのに。
会長は、悪戯がばれた子供のような表情で。

「実は黒神と俺は、“喧嘩してたんだよ”」

「はい？」

よく意味がわからなかったぞ。
ていうか初耳だ。

「あいつは俺のやり方を、真っ向から否定した。間違っていると言って、俺とあいつは対立したんだ」

「対立したって……大丈夫だったんですか？」

色んな意味で。

「入学早々三日三晩殴りあってたな。その後も会う度に喧嘩してた。そのお陰で、あいつを生徒会長に推薦しようと思いたったんだけどな」

黒神と会長の“殴りあい”……

何かもう、凄まじいな。

多分この想像よりも、恐ろしいことが起こっていたのだろうけど。

会長は平然としているが、その手のやり取りで黒神が手を抜くわけがない。

どんな理由で喧嘩なんかしてたんだか知らないが、とにかく会長も黒神の“人格”に惚れたと。

そういう、訳だろう。

「そういう訳だよ。あいつに“俺が視えていた理由”がわかった時点で、俺は引退を決意した。だからこれからは、暗躍することもなく静かに隠居生活を送るさ」

「――――どうせまた、善意の中にある悪意が嫌いだとか、皆を守りたいだとか、そういうことを言ったんでしょう？馬鹿みたいに正直で、嘘みたいに真っ直ぐ人間を信頼しちまうような奴ですからね。昔からあいつは――――正論しか言わない」

耳が痛くなるような、馬鹿正直な持論。

幾度となく聞かされてきた、まるで合言葉のように染み付いている大言壮語。

黒神めだかは馬鹿だった。

馬鹿みたいに、正しかった。

「その通りだ。さすがに、何でも“わかってる”みたいだな」

「そんなこたぁありませんよ。単に、無駄に付き合いが長いだけで」
「お前や人吉みたいな奴がいたからこそ、黒神は真っ直ぐでいられたんだろ。もっと自分に自信を持てよ。お前は、普通にすごい奴なんだから」

……うーん。
照れた。
何だか知らんが誉められた。
けれどまあ、悪い気はしない、よな。

「そんじゃ、選挙、頑張れよ。黒神が当選すれば、お前も生徒会入るんだろ？」

「いや、入りませんよ。これ以上あいつに付き合うのはごめんですって」

「何だよ、そうなのか？黒神は絶対にお前を入れたがると思うけどな」

「――――俺なんて何の役にも立ちませんからね。あいつだってわかってる、はずです」

「どうだかな。結局全ては選挙の結果で決まる。お前は黒神を支えてやれば、それでいいんだから」

そう言って、会長は姿を消した。
気付いたら、視えなくなっていた。
何だか責任重大だなぁ、俺。

確かに気は重い。
けれど、確かに。

「……」

この場所は心地好いと――
思えるようには、なっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1765r/

普通か負痛の偽物嘘憑(クラッククライアー)

2011年10月7日15時28分発行